

巻 頭 言

日本の各地に存在する博物館の多くは目まぐるしい現代社会の渦の中で多方面にわたる困難な問題をかかえていることは周知の事実である。また全国の博物館課程ないしそれに類する博物館学芸員に関する科目を有する大半の大学は学芸員養成という具体的な問題も含めて大きな壁につきあっているように感じられる。

一地方の小さな大学である 当別府大学文学部においても博物館課程のあり方について再検討を重ねつつある。このような現状に少しでも対峙する具体的な方法として「博物館研究報告」を公刊することにした。これは博物館学ならびに博物館実習の受講生の一人一人が社会教育の一担を担なう博物館を、そして、その活動を身近なものとしてより深く追求するための一つの方法としたいという立場から出発するものである。いろいろな点で全く力量不足の感はまぬがれないが、博物館課程を通して学ぶ中で何らかの具体的な方法を用いて我々の生活の基盤とも言うべき地域社会への働きかけを少しでも行なっていこうというものである。

最初の試みとして「博物館研究報告」第1号(1972年)は大分県下毛郡の片田舎で「高機」を織りつづけている方の採訪報告をとりあげることにした。博物館実習の一環として現地を訪れた時、我々の心の奥深くに刻み込まれた事は、質よりも量、内面よりも外面のみてくれそして少しでも早くという方向で進んでいる現代の物質文明に置かれている毎日の生活を今一度ふり返ってみる必要があるではないかということであった。

博物館研究報告を公刊するにあたって、今後とも関係者のご指導ご教示をお願いいたしたい。